

高等学校における「漢字仮名交じりの書」の指導法
と鑑賞の一考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-04-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鳥宮, 暁秀 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008355

高等学校における「漢字仮名交じりの書」の指導法と鑑賞の一考察

A Consideration of Teaching Methods and Appreciation
for The Book of Chinese Characters with Japanese Syllabaries'
in The High School Education.

鳥宮 暁 秀

Gyoshu TORIMIYA

（平成12年10月10日受理）

はじめに

平成15年4月1日から、年次進行により段階的に適用される高等学校学習指導要領の全面的な改訂において、「A表現」の「漢字の書」「仮名の書」「漢字仮名交じりの書」の3分野の構成順序を入れ換え、「(1)漢字仮名交じりの書」「(2)漢字の書」「(3)仮名の書」に改めた。「漢字仮名交じりの書」が前面に置かれたのは、「中学校国語科書写と高等学校芸術科書道との系統性を踏まえると共に、この分野が書を生活に生かす態度の育成を図る」ということである。〔注1〕また改善の基本方針に「表現及び鑑賞の活動を通して生徒が楽しく書にかかわり、生涯にわたり書を愛好する心情と感性を育てるとともに、書の文化と伝統を尊重する態度を育てとあり、」小学校、中学校で育成された書写力を一層充実して行われるようにするとある。〔注2〕

以上のことを考えると「漢字仮名交じりの書」の指導法及び鑑賞がいかに今後大切であるかがわかる。今迄現場において実際に取組んでこなかった指導者も数多くいたことはまことに残念である。しかし今後はそうは言っておられない状況になってくる。そこで新しい高等学校学習指導要領になっても、又現在の指導要領においてもできる指導方法と鑑賞についての一考察をまとめてみた。

「漢字仮名交じりの書」の定義

「漢字仮名交じりの書」とは漢字仮名交じりの詩歌や文章・語句などを素材として書いた書をいう。漢字仮名交じりという日常的な表記を用いるので、芸術的な表現とともに実用的な表現も含まれる。

平成15年4月1日から年次進行により段階的に適用する、指導要領においては、中学校国語書写と高等学校芸術科書道との関連性を踏まえ、また、書を生活に生かす態度の育成を図るための基本的な分野であることを重視して「書道Ⅰ」では必ず扱うこととしている。

「書道Ⅰ」の「漢字仮名交じりの書」

1 「漢字仮名交じりの書」の学習指導の工夫

ア 内容の取扱いとその留意点

(1) 字形や全体構成に関する内容

字 形＝・点画の位置、方向、長短、肥瘦(細太)、曲直、仰平伏、分間、疎密などの組み立て方

- ・偏旁、冠脊、によう、垂れなど、部分の組み立て方
- ・中心(重心)、均斉、均衡、概形(外形)など、1字の形の在り方

全体の構成

- ・文字の大小・疎密、字間、行間、筆脈、墨の潤滑、濃淡、墨継ぎ、字配り、字群の構成などの在り方
- ・軽重、強弱、剛柔、明暗、清濁、一貫性(気脈の貫通)、変化と統一、余白など全体感の在り方

以上の内容が主になると思われるが、紙面構成のバリエーション、同じ大きさの用紙に書く場合その中をどのように使うかによって作品の効果が違ってくる。紙面をどう使い、自分の思っていることをどのように表現するかが大切である。

例として和歌を半紙横にどう書くかとした場合

- ① 天地・行間を揃える。(2)天地とも不揃い。(3)天を揃えて、地を不揃いに。(4)地を揃えて、天を不揃いに。(5)5・7・5と7・7のブロックに分ける。(6)また何行に書くか。以上多種にわたる構成や字形の組み立てのあることを身につけさせる。
- ② 表現については、作品としての表現に重きを置くか、実用的な面に重きを置くかを考慮して、目的や用途に応じた取扱いをし、生徒の実態や特性に配慮しながら効果的な学習指導を進めていくようにする。

表現に関しては種々あるがどのような表現にするか、発想を豊かにしていくことがまず大切であり、自主的に表現方法が選択できるように取組めることが必要である。以下種々な表現方法を記すが、この他にも色々あるであろう。ユニークな感想と表現を生徒達に考えさせることも効果のあることと思う。

例として、①整齊な表現、②流麗な表現、③重厚な表現、④細細な表現、⑤力強い表現、⑥柔らかな表現、⑦運筆を遅くした表現、⑧運筆を速くした表現、⑨筆圧を強くした表現、⑩筆圧を軽くした表現、⑪線の太い、細いによる表現、等が考えられる。

(2) 用具、用材について

主な用具・用材の類別と扱い方

【主な用具・用材の類別と扱い方などの例】

毛 筆・種類 (和筆, 唐筆など)

- ・材質 (獣毛筆, 竹筆, 藁筆, 草筆, 木筆など)
- ・大きさ (大筆, 中筆, 小筆など)
- ・筆毛の長さ (長鋒, 中鋒, 短鋒など)
- ・筆毛の弾力 (剛毛筆, 兼毛筆, 柔毛筆など)
- ・穂の形 (柳葉筆, 面相筆, 延喜筆, 雀頭筆など)
- ・穂の作り方 巻筆, 水筆(捌き筆一固め筆)
- ・筆の下ろし方, 洗い方など後始末や手入れの仕方
- ・保管の仕方など

硬 筆・種類 (鉛筆, 万年筆, つけペン, ボールペン, フェルトペンなど)

墨 ・種類 (和墨, 唐墨など)

- ・材質 (油煙墨, 松煙墨, 固形墨, 液体墨など)
- ・大きさ (丁型など)
- ・磨り方, 扱い方, 保管の仕方など
- インク・種類 (水性, 油性など)
- 硯
 - ・種類 (和硯, 唐硯など)
 - ・材質 (石, 陶磁, 瓦など)
 - ・大きさや形, 洗い方, 手入れの仕方など
- 紙
 - ・種類 (和紙, 唐紙, 洋紙など)
 - ・材質や用途及び用紙 (半紙, 画仙紙, 料紙, 色紙, 短冊, 便箋, 封筒, 葉書きなど)
 - ・大きさや形, 扱い方など
- 文 鎮・材質, 大きさや形, 扱い方など
- 下 敷・材質, 大きさや形, 扱い方など
- その他・印刀, 印材, 印泥, 印矩, 印箋, 朱墨など

用具・用材によって書は表現されるものであり、それぞれによって性能が違い、用い方や、取扱い方の違いによって素材(文学)を書く場合にも、表現は大きく左右される。したがって用具・用材に理解と関心を持たせるように、初期の学習段階から指導に配慮していきたい。

例として、①筆、剛毛筆、柔毛筆、兼毛筆の毛の質による表現の変化や、長鋒、中鋒、短鋒による線質の変化による表現の変化。②墨、濃墨や淡墨(青墨、茶墨)による表現の変化について、③紙、にじむ紙、かすれる紙、にじみみが出る紙、洋紙を使った場合等による表現の変化。

- (3) 書体については、漢字は楷書や行書を用い、仮名については漢字と調和させるようにすることが大切である。平易な連綿を加えることもできる。

「漢字仮名交じりの書」においてはまず第一に誰にでも読める、理解できるという観点からすると、篆書や草書といった書体は可読性に乏しいということでこの範疇から外さなければならない。「漢字仮名交じりの書」の基礎として、行書体が最も適している」[注3]このように仮名との調和を考えると行、草体が一番使用されよう。又楷書も六朝風 野性的で、渾朴な表現の時には大いに使用されてよいし、隷書を使用することも可能であるが「書道Ⅰ」では楷書、行書が主体となるであろう。

次に調和であるが、「漢字は行書が中心書体で……したがって行書の気分を加えて用いている場合が多い。したがって直線的な漢字の表現力を養わねばなりません。かたかなは、もともと楷書の一部を独立させたものですから、漢字との調和ははまったく問題がありません。問題はひら仮名です。ひら仮名は曲線的で直線の部分はきわめて少ない。したがって両者の調和には、まずひらがなの原形をいくぶん変えて、直線的な形を工夫しなければなりません。漢字とかなの問題を形の上だけで調和させようとする大きな失敗をします。漢字とかなの運筆のリズム感の一致をはかることを忘れてはなりません」[注4]というようにいかに調和させるかは大変難しいことです。あまり文字の多いよりは、5文字から10文字あたりから調和の方法を学習させるとよいであろう。

- (4) 素材の選定に当たっては、自己の感興を盛りこみやすい自分の言葉や感動した言葉など

から入っていくことが望ましい。たとえ、それが未熟なものであっても、書こうとする意志を育てていきたいものである。

いずれにせよ、生徒の特性や実態に応じて、弾力性をもって取扱っていくことが大切である。その際、次のようなことも考えられる。

- ① 生徒の身近にあって親しみやすい語句や、校歌、応援歌、童謡などから入っていく。手紙、はがき、贈答用語も実用的で取扱っていく。
- ② 短文による文学作品（俳句、短歌、詩文）などを書いてみる。
- ③ 目的や用途に応じた掲示物、映画やテレビ番組、あるいは本などの題字、キャッチコピー、標語、格言などを取扱ってみることも考えられる。

近ごろは若い人達の歌詩の一節が多くなり、ローマ字を使用しての作品も多くなりつつある。新しい傾向の台頭というべきか。身近な語句からの取組が大切である。実用的な面からいうと日常用語の他に、掲示物を書くことから始めるのも一考で、格言などは芸術性というより実用的な書き方の方法が一般的には受け入れやすいのではないかと思う。

(5) 文字数と大きさ

- ① 初期においては、文字数が多いとまとまりにくい面があるので、少字数のものが好ましい。その際、漢字と仮名の字数がどちらか一方に偏り過ぎないように配慮し、慣れるにしたがって字数を増やしていくようにする。
- ② 文字の大きさのとり方は、目的や用途により一律にはいかないが、実的な表現の場合は、一般に漢字に比べて仮名をやや小さめに書いて漢字と調和させる。芸術的な表現では、大きさを規則的にしないで、混然とした調和を追求する方法なども行われる。

文字の大きさは半紙に10文字ぐらいが一番初心者には書きやすい数、大きさといえる。上記にもあるように、漢字と仮名の配分、割合に充分注意すべきである。

イ 年間指導計画への位置付け方の工夫及び留意点

年間計画全体から見ると「漢字の書」「仮名の書」を学習した後に取扱うことが、表現力、理解力からみて妥当と思われる。また、中学校書写との接続を図るという面から、1学期に取入れることも考えられる。

今迄の要領と、平成5年からの要領において学習する順序が変わるだけに、いかに「漢字仮名交じりの書」をいつの時期において、どう入れるかが非常に問題となるが、実的な面から入ることとして楷書主体の表現が最初大切である。しっかりと実的なものが書けてから「漢字の書」「仮名の書」などを学習した後に、芸術的表現へと移っていくのが自然な形式と思う。

次の表は前半＝実的な表現を立体としたもので、後半は「漢字の書」「仮名の書」を行った後における芸術的表現を主にしたものである。

年間の時間配当を16時間とした場合における例を以下に示すが、生徒の特性、地域や学校の実態等に応じて、芸術的な表現と実的な表現との時間配分を考え、効果があがるよう工夫する。

〈「書道Ⅰ」における「漢字仮名交じりの書」の時間配当の例〉

内 容	(前 半)								(後 半)							
	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	5	6	7	8
用具・用材の取扱と解説	◎															
実用的な表現 (手紙、掲示物ほか)		◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎								
教科書教材および 倣書の学習									◎	◎	◎					
詩文、俳句、 短歌による創作												◎	◎			
自分の言葉、感動した 言葉による創作														◎	◎	◎

◎印=16時間配当の場合

ウ 学習指導法の工夫と留意点

- (1) 導入にあたっては、実用的な表現（書かれるものの目的や用途が実用を目指していること。手紙、はがき、ノートや文書など）から入るか、芸術的な表現（鑑賞を目的としたもの。創作作品など）から入るかは、生徒の特性、地域や学校の実情などを考慮して行うようにする。
- (2) 実用的な表現においては、中学校「書写」との関連から、整正の美を主とした楷書による学習から行書へと展開させていく方法も考えられる。いずれにしても、目的や用途に応じるとともに、生徒の興味や関心を高めるよう指導に配慮する必要がある。
- (3) 芸術的な表現の指導においては、初めから多様な表現は困難と思われる場合、教科書の教材や資料等の鑑賞によって理解を図った上で、平易な倣書的な表現方法から入って、次第に程度を高めていくようにすることが考えられる。
- (4) この分野での古典が確立されていないことを考慮し、名筆の鑑賞や、「漢字の書」「仮名の書」における書体、書風に応じた用筆・運筆による調和のさせ方について学習させる方法もあろう。
- (5) 自己の意図に基づく表現方法を探究させ、生徒の個性や工夫が十分表現されて、その達成感が次の表現活動を促す力となるようにすることが大切である。
- (6) 構想～表現～反省・吟味～再表現という推敲活動を繰り返した上で、一つの作品を完成させていく。その際、生徒の表現意欲の高まりや制作過程での苦悩、あるいは完成の喜びなどの体験を大切にしながら、適切な指導を進めていくようにする。
- (7) 倣書的な表現であるが、創作といっても急に制作できない生徒もいることを配慮して、今迄「漢字の書」で学んだ古典の中より自分の好きな書風を選んで、その感じを表現していく倣書方法がある。次にその具体的例として各種古典をあげた。どのようなポイントが必要かも例記した。
 - ① 古文(甲骨文)＝直線的に明るく鋭く、漢字も仮名も筆圧で切り込むように工夫する。
 - ② 隸書(封龍山碑) 隸書は横に線が伸び波タクが特色だが、仮名を小さめにして素朴にする。

- ③ 楷書（さん宝子碑）直線構成の中にやや隷書的の点画がある。仮名も直線的に調和させる。
 - ④ 行書（木簡残紙）まわるく、やわらかいこだわりのない紙質を蔵筆により表現し仮名も立体的な線質にする。
 - ⑤ 楷書（造像記全般）たくましく書き、点折で一度筆を切るようにする。仮名もその用筆で書く。
 - ⑥ 楷書（鄭道昭の書）ゆったりとした線で点折は極端に筆圧を加えず、仮名も息の長い線とする。
 - ⑦ 行書（蘭亭叙）清らかに品位のあるように、線の動きを觀し、ねばりある線質とする。
 - ⑧ 行書（枯樹賦）細く鋭く微妙な線の動きに注意し、細くても鋭くなるように書くことが重要である。
 - ⑨ 楷書（建中帖）線の丸味、厚味を仮名にも調和させ、素朴にしっかりと書く。
 - ⑩ 行書（行書詩卷）線の変化、全体の流れ、点画の発達退化に着目し、筆の抵抗を応用する。
 - ⑪ 仮名（秋萩帖）ゆったりとした中にも、張りのある線質を大切に、調和を大切に漢字も行、草体を使用する。[注5]
- (8) 名筆の鑑賞について、また身近な作品の鑑賞については、「鑑賞」のところで具体的に示す。

エ 教材の工夫

- (1) 学習した「漢字の書」及び「仮名の書」の古典や教科書の作例、資料（作品集など）やビデオ教材等を幅広く鑑賞させ、芸術的な表現へと発展させるようにする。その場合、あまり偏った表現や形式にならないように配慮する。
- (2) 地域にある句碑、歌碑等を見学したり、拓本や写真によって鑑賞させたりすることも考えるようにする。
- (3) 教師の作例は、生きた資料として活用するようにする。

オ 教具・教育機器などの活用と工夫

効果的な学習指導を進めるために、OHP、VTR（ビデオテレビ）、教材提示装置などを積極的に活用するようにする。用筆・運筆などの技法の学習や行の流れ、全体の構成などを取扱ったり、指導者の表現例や生徒の制作過程などを示したりする時も大きな効果が期待できる。部分的な拡大像の提示により、理解や鑑賞を深めさせていくなどして存分に活用したいものである。

カ 評価の工夫

学習目標に照らして、どの程度達成されたかを判定するのが評価である。学習指導上の資料として生かすべきものであって、決して生徒を区別するためのものではない。評価の対象として例えば次のような項目が考えられよう。

- ① 「漢字仮名交じりの書」についての理解ができているか。
- ② 漢字と仮名との調和が工夫されているか。
- ③ 書体・書風に応じた用筆・運筆が、仮名との調和において適切に表現され、効果をあげているか。

- ④ 目的や用途に応じた表現ができているか。
- ⑤ 用具・用材の使用に工夫がされているか。
- ⑥ 学習全般にわたって、関心、意欲、態度はどうであったか。

2 鑑賞の学習指導の工夫

ア 内容の取扱いとその留意点

- (1) 鑑賞の学習指導においても、楷書、行書を主とするが、生徒の特性、地域や学校の実態に即し、平易な隷書を加えることもできる。また、篆刻の学習との関係から篆書を、仮名の書の学習との関連から、草書を加えることもできる。
さらに、書体の成立を扱うためには、全書体を取上げることになる。
- (2) 表現の学習と関連付けて扱うとすれば、導入期では、整正美の鑑賞から入って次第に均衡美へと進めて鑑賞力を高めていくようにするのが普通であろう。
- (3) 仮名の書の鑑賞については、連綿や変体仮名から生まれる流動美や構成美なども取扱うようにする。
- (4) 「漢字仮名交じりの書」については、鑑賞の対象を身近な書にも求めるようにする。また古典が確立されていないことを考慮し、著名作家の作品や、現代書家の作品を鑑賞させることも身近な方法である。主に著名人の作品としては、高村光太郎、若山牧水、会津八一、中川一政、武者小路実篤、河東碧梧桐、良寛、石川啄木、小林一茶等が教科書では多く記載されている。又名筆としては「三宝絵詞」「定家臨貫之土佐日記」「伝源 俊頼、元永本古今集」「伝藤原行成、近衛本和漢朗詠集」などがあげられる。

イ 年間指導計画への位置付け方の工夫及び留意点

- (1) 表現と鑑賞とは互いに深く関連するものであるから、表現活動を主とする授業においても、常に鑑賞活動に配慮して計画することが必要である。授業の展開（指導過程）においては、鑑賞から入って表現に移行する場合と、表現から鑑賞に移行する場合（特に臨書の場合）とが考えられる。また、鑑賞で授業をしめくくる場合と、表現でしめくくる場合とが考えられる。こうして、両者を有機的に関連させる形で授業が進行する。このことは、「書道Ⅱ」、「書道Ⅲ」にも共通することである。
- (2) 鑑賞の学習活動を主とする単元（題材）の特設については、「書道Ⅰ」においては、古名跡はもとより、生徒作品の鑑賞及び身近な書の鑑賞、地域内の学校の合同作品展の鑑賞、漢字の書体、仮名の成立などについて工夫することが考えられる。なお、漢字の書体、仮名の成立についての学習は、関連する資料の図版やVTR、スライド、OHPなどによる鑑賞を主として進めることが有効であろう。

ウ 学習指導法の工夫と留意点

表現活動において生徒一人ひとりの個性が尊重されるのと同様に、鑑賞活動においても個性が尊重されなければならない。個々の生徒の感じ方の方向や強さが異なっても、その違いを大切に、一つの感じ方だけを性急に押しつけないよう配慮することが大切である。また、次のような配慮も必要である。

- ・ 古典をどのように観察し、どのように鑑賞すればよいかを多くの例で示すこと。
- ・ 指導者が先に結論的なことは言わないようにして、生徒の発言を待つこと。
- ・ 生徒の発言をできるだけ肯定的、共感的に聴くこと。
- ・ グループを作って話し合わせてから、感じたことを文章化させてみるのも、発言を促

す一つの方法である。

鑑賞力は、好悪の感情を基盤にして、感動する心を広げ磨くことによって高められていくものであるから、価値論はさておき、まず、生徒自身の言葉で感じたままを語らせることが大切である。この体験を積み重ねる中で、おのずから、書の良さや美しさを味わい認識する感覚が芽生え育っていく。

(1) 直観的鑑賞の指導

- ① 「漢字仮名交じりの書」の作品の性情や調和の様子（全体感）を生徒に把握させる場合は、第一印象を尊重することが大切である。感じ方の方法や強さに見られる個人差を大切に扱いたい。
- ② 作品一つだけを鑑賞させるよりも、それと対比的な他の作品と対比して鑑賞させるようにすると、いっそうその特性を明らかにすることができる。また、どんな作品と組み合わせるかによって、その印象が変化することに気づかせるようにする。

(2) 分析的鑑賞の指導——書的美を構成する基本的要素の把握

- ① 「漢字仮名交じりの書」の良さや美しさの要因を分析的に把握しようとする場合、留意すべきことは、表現技法に結びつけて鑑賞することである。つまり、字形の構成法、点画や線、用筆法、運筆法などに焦点を当てて鑑賞することである。
- ② 字形の構成について具体的に鑑賞の視点をあげると、点画の位置、方向、長短、曲直、均斉・均衡などがある。また、行書の古典を対象とする場合は、これらのほかに、点画の肥瘦、潤濁、運筆の遅速・緩急・抑揚のリズムなどが鑑賞の視点となる。肥瘦、潤濁、運筆のリズムなどは、全体構成を分析的に鑑賞する場合にも重要な視点となる。
- ③ 分析的鑑賞は、創作学習を通して深まるものであり、両者の関連がいかに密接なものであるかを理解させることにも配慮したい。

(3) 創作活動を伴った鑑賞の指導

上記の直観的鑑賞や分析的鑑賞を伴う学習を通して鑑賞力を高めるといふ活動を積み重ねる中で、次のように、書への理解を深めるとともに、創作活動の意義を考えさせることができる。

- ① 創作活動を伴った鑑賞においては、例えば、近代の作家の作品の直観的鑑賞や分析的鑑賞を通して、創作の意図やそれに基づく構想を吟味させるようにする。その際、取上げる作品は、「書道Ⅰ」の性格や目標に照らして選択するが、評価の定まらない特異に作品は避けるべきであろう。
- ② 書の良さや美しさの鑑賞は、既に述べた通り、主体的な感じ方を尊重し、生徒の感受力の育つのを助ける配慮を忘れないようにする。
- ③ 創作活動によって習得した技法で、短い語句ないし俳句などを素材として倣書させ、それぞれを相互に鑑賞させるようにする。その際、まず、全体から感じられるものは何か、その第一印象を発表させるようにする。（直観的鑑賞）
- ④ 作者自身の表現意図、構想から表現に至る過程とその成果を自己分析させ、他者が受けた印象との異同を吟味させる。そのことを口頭で発表させたり、鑑賞カードやノートに記録させたりする。（分析的鑑賞）
- ⑤ 作者の意図にかかわらず、他者の眼にはそれぞれに映る——これが「作品」の特性であり、つまり、作品が作者を離れて“ひとり歩き”することを理解させる機会とする

ことも意義がある。

⑥ 上記の事項などを基礎として「書道Ⅱ」から「書道Ⅲ」へと発展させ、深化を図る。

(4) 身近の書や日常生活の中の書の鑑賞の指導

① 身近に見られる書については、長期休業期間などを利用して鑑賞体験を持たせるようにする。

たとえば、床の間の掛軸や、その他、室内に飾ってある書、屋外の文学碑やその他の石碑、門額、商店などにある木額、看板、表札などを鑑賞し、記録させて提出させる方法がある。それらのうち、可能なものについては、グループを作って採拓させるのもよい。しかし、この場合は、綿密な事前の調査研究及び事例による指導が必要である。安易に取上げることには問題があろう。

② 社寺や公園などに石碑や木額が多く見られる地域では、校外授業の一つとして取上げることもできるであろう。

③ 指導者が、これらをカメラやビデオに収め、あるいは、採拓等によって鑑賞資料として収集し、整理編集して教材化する方法もある。それらと古典との共通点と相違点、独自性、地方性等について話し合ったり、鑑賞の手引を付して教材として活用したりすることができれば、その学習効果は極めて顕著なものとなるであろう。

④ 日常生活の中で目にふれる実用書についても、適切なものを収集して教材化し、書体や形式が、その目的や用途に応じて工夫されていることに気付かせるようにする。

(5) 漢字の書体、仮名の成立についての理解を深めるための指導

① 日本史年表、世界史年表に書道に関する事項を組み入れて書道史年表を作成させ、それに備考欄を設けて、漢字の発生、書体の設立と変遷、仮名の成立と変遷などを扱うようにすると、学習が立体化するであろう。単なる暗記学習にならないよう、可能な限り図版教材を挿入するなどして、視覚を通して把握できるように工夫することが大切である。その際、「歴史」や「国語」における学習と関連づけるよう配慮することが大切である。

② 「書道Ⅰ」で学習する書体は楷書と行書が主であるが、その他の書体についても鑑賞を通して理解させるようにしたい。各書体の成立については、その書体を取扱うごとに知識・理解事項として指導するにしても、取扱う順序は、必ずしも成立順であるとは限らない。したがって、成立順に整理して理解させるには、鑑賞の時間を特設するのが効果的であろう。その時期は、総括という意味からいうと、年度末が適当であろう。

③ 仮名の成立については、すでに中学校で学習済みであろうが、より適切な資料の鑑賞を通して理解を深めさせたい。特に、草書は仮名の成立を理解させるためには不可欠であり、変体仮名との関連にもふれる必要がある。

エ 教材の工夫

(1) 主たる教材である教科書の使い方の工夫が第一であることは言うまでもない。どのように使うかは指導者の工夫しだいであるが、年間指導計画に応じて、主体的、弾力的に対応することが望ましい。

(2) 古典や創作作品の例示が豊富であることにこしたことはないが、あくまで、生徒の実態を考慮して、最適のものを最適の方法で提示すべきであろう。

(3) 地域にある書に関する資料を調査し、スライドやビデオに収めるなどして自主的に作成

した教材は、生徒にとってより身近に感じるものである。学習意欲も湧き、いっそう鑑賞が深まるであろう。

オ 教具・教育機器などの活用と工夫

印刷図版資料や肉筆資料などのほかに、OHP、OHC（教材提示装置）、スライド、ビデオなどを大いに利用するようにする。ただし、使用目的と手段を取違えないようにしなければならない。

これらの機器類は、直観的鑑賞や分析的鑑賞に好都合である。分析と総合、配列と組み合わせ、縮小と拡大など、映像を操作することによって効果は倍加するであろう。

なお、「書道Ⅱ」、「書道Ⅲ」においても、上に述べたことは基本的に変わるものではない。要は、生徒の能力、興味・関心や適性、学校の実情、学習指導の内容等によって、適宜、教具や機器等を選定し、よりいっそう学習効果が上がることを期すべきである。

カ 評価の工夫

- (1) 「書道Ⅰ」における鑑賞は、中学校までの経験に照らして、初めての学習と言っても過言ではない。したがって、平易なものから導入し、徐々に鑑賞の眼を開かせていくようにする。そのための評価の工夫は極めて大切である。
- (2) 鑑賞学習の評価には、口頭で発表させる場合の評価や文章に書かせる場合の評価についても、できるだけ多く取入れるようにする。
- (3) 自分なりの感じ方や味わい方ができるようになることに役立つ評価の方法を工夫する。そのためには減点法でなく加点法をとることが大切である。生徒なりの感じ方をすくい上げて認めるようにし、少しでも感じ方に自信が持てるよう、可能性の伸長を図りたい。
- (4) 参考までに、評価の観点の例を以下にあげてみる。
 - ① 書の性情や調和などについて、直観的に把握できたか。
 - ② 一字や全体の構成について、均斉や均衡の美を味わうことができたか。
 - ③ 線質を支えている用筆や運筆が分析的に把握できたか。
 - ④ 身近の書や日常生活の中にある書への興味や関心を持つようになったか。
 - ⑤ 漢字の書体、仮名の成立、漢字仮名交じりの書が理解できたか。
 - ⑥ 書を愛好する心情が高まったか。

書道Ⅱの「漢字仮名交じりの書」

1 「漢字仮名交じりの書」の学習指導の工夫

ア 内容の取扱いとその留意点。

- (1) 「A表現」の「(1)漢字仮名交じりの書」「(2)漢字の書」「(3)仮名の書」の順序は「書道Ⅰ」を受けて同様であるが、生徒の特性、地域や学校の実態を考慮して、いずれか一つ以上を選択して扱うことができるようにしている。〔注6〕

「書道Ⅱ」では「書道Ⅰ」を受けて更に内容を高めていくことである。色々な条件が各学校にあるにせよ、現代の若い世代を考えると「漢字仮名交じりの書」を選択する生徒はかなり多いものと考えられる。実用的形式においては、ノート、葉書、手紙、掲示物、贈答用語等が考えられる。芸術的形式としては半紙、条幅色紙、短冊等を学習し鑑賞の能力を一層高めていくことができるようにする。

- (2) 書体については普通、楷書、行書、草書とし、隷書も考えられる。いずれの書体による

にしても、漢字を主体として仮名をその用筆・運筆に引き寄せるか、あるいは、その逆の方法で調和を図ることが考えられる。指導者の作例、教科書教材やその他の資料等によって鑑賞させ、理解を図りながら、「書道月」で学習してきた内容を基盤にして展開させていくようにする。

(3) 素材の選定については、生徒の感興を高め、内なる自己を引き出していくよう配慮する。又実用面においても充分力が発揮できるよう配慮したい。

- ① 俳句、短歌、詩、校歌、応援歌、童謡、小説の一節などを取上げる。
- ② 地域と関係が深い文学作品や民謡などを書く。
- ③ 自分の言葉や、感動を受けた言葉を取扱う場合は、事前に用意させておき、その背景などをしっかり把握させておくようにする。
- ④ 手紙や案内状、はがき、封筒の宛名、贈答用語など目的や用途に即した実用的なものを取扱うようにする。

(4) 文字数と用具・用材

- ① 文字数については、少字数、多字数などいろいろ考えられる。同じ比重で学習させていくのもよいが、生徒の適性に合わせて選択させることも考えられる少字数は半紙の場合5字～10字、多字数の場合は10字～30字程度が一つの目安となろう。
- ② 用具・用材については、「漢字の書」「仮名の書」で用いられているものでよいであろう。意図に応じた表現や効果を上げるために特殊な用具の使用も考えられる。
- ③ 用紙も、半紙のほか画仙紙の全紙、半折、半折の1/2、1/3、1/4、などを用いて内容に合った形式を考えていくようにする。用紙の質についても、にじみの多いものや少ないものがあり、洋紙などを工夫して用いることも考えられる。

(5) 名筆の鑑賞に基づく表現

ここで言う「名筆」とは、古典とされるものはもとより、和漢のすぐれた書を指している。言うまでもなく「漢字仮名交じりの書」は、漢字と仮名とから成っているのであり、したがって、鑑賞の対象が漢字仮名交じりの書の名筆でなくても、「漢字の書」からも、「仮名の書」からも、創造的な表現のための何かを得ることはできる。例えば、「名筆」を鑑賞することによって次のようなことを学ばせていきたい。

- ① 表現の技法（用筆・運筆、全体の構成、字形、章法など）を学ぶ。例えば、空海の行書作品を鑑賞し、そこから得た書きぶりによって統一と調和をはかれば空海風のものができる。同様に顔真卿風、褚遂良風といった表現を工夫することもできるようになる。また、「粘葉本和漢朗詠集」を鑑賞して得た何かで統一と調和をはかれば、粘葉本和漢朗詠集風の漢字仮名交じりの書が表現される。
- ② 近・現代人の手紙や詩文の書からは、漢字と仮名の調和のさせ方、全体の構成、詩文の内容と表現技法の関係などを学び取り、それを源泉として新たな創造的表現に向かっていくようにする。

イ 年間指導計画への位置付け方の工夫及び留意点

(1) 「漢字の書」と「漢字仮名交じりの書」の2分野を選択した場合と、「仮名の書」も含めた3分野を同じように行う場合とで、時間配当が異なってくる。次に示す時間配当は、考えられる一つの事例であり、学校の実態、生徒の特性などにより多様な在り方が考えられるであろう。

- ① 「漢字の書」と「漢字仮名交じりの書」の2分野を選択した場合の1例として、22時間（11週）～26時間（13週）程度配当することが考えられる。
- ② 3分野を同じような比重で行う場合の1例として、10時間（5週間）～16時間（8週間）を充てることが考えられる。

〈「書道Ⅱ」における「漢字仮名交じりの書」の時間配当の例〉

○印=10時間配当の場合

◎印=16時間配当の場合

時間 内 容	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
用具・用材の取扱い 「書道Ⅰ」との接続	◎ ○															
実用的な表現 (手紙、掲示物など)		◎ ○	◎													
教科書教材および 倣書の学習を中心と した学習			○	◎ ○	◎	◎	◎	◎								
詩文、俳句、短歌その 他による創作					○	○	○	○	◎ ○	◎ ○	◎	◎				
自分の言葉、感動した 言葉による創作													◎	◎	◎	◎

ウ 学習指導法の工夫と留意点

- (1) 「書道Ⅰ」で学習してきたことを土台として、多様な表現を追求させ、理解を広げさせるよう配慮する。また、生徒の感興を高め、個性豊かな表現力を身につけさせるようにする。
- ① 目的や用途に応じた形式や、整正の美から多彩な変化と統一の美へと目を向けさせるようにする。
- ② 「漢字の書」、「仮名の書」の学習で習得した技法や理法を、漢字仮名交じりの書に活用させることによって、一層創造力及び表現力の幅を広げるようにする。

エ 教材の工夫

- (1) 学校や地域の実態にも配慮して、生徒の興味・関心に基づく素材を選ぶようにする。
- (2) 作品制作の手がかりとして、教科書教材、資料、自作の鑑賞教材や生徒の作例などを効果的に活用するようにする。その際、指導者の押しつけにならないよう配慮し、生徒の作例を使用する場合も、偏った取扱いにならないよう配慮する。

オ 教具・教育機器などの活用と工夫

「書道Ⅰ」のオに示したことを発展させ、より一層効果があがるよう、適切な機器の活用を考えていくようにする。

カ 評価の工夫

芸術的な表現が主となる場合、それぞれの個性や能力により、かなりの個人差が生じてくるとも思われる。「書道Ⅰ」のカの①～⑥に示したことを前提としていくようにする。

2 鑑賞の学習指導の工夫

ア 内容の取扱とその留意点

- (1) ここでは、「書道Ⅰ」の内容を高め、系統的にすすめていくようにする。
- (2) 表現の学習活動との関係を一層有機化するとともに、鑑賞の学習活動をより能動的なものにしていく。
- (3) 直観的鑑賞と分析的鑑賞に加えて、時代、風土、筆者の個性との関連など総合的鑑賞にも向かわせていくようにする。
- (4) 表現形式(条幅、扁額、色紙、短冊、懐紙、書画帖、巻物等)と表現効果(全体構成、部分の構成、字形、文字の大小、用筆や運筆、余白等)についての着眼点を明らかにしながら鑑賞の学習指導を進めるようになる。
- (5) 「書の変遷」の概要を理解させることは、日本文化の継承と発展を図る上から極めて大切なことである。
- (6) 書体については、楷書、行書、草書、隸書、篆書、平仮名、変体仮名から篆刻や刻字も鑑賞の対象になる。ただし、生徒の特性、地域や学校の実態にあわせて、教材を工夫して扱うようにする。

イ 年間指導計画への位置付け方の工夫及び留意点

- (1) 表現と鑑賞は互いに深く関連するものであるから、表現活動を主とする場合においても、常に鑑賞活動に配慮するよう計画することが必要である。このことは「書道Ⅲ」にも共通する。
- (2) 鑑賞を主とする学習指導の場を特設する場合、一般的には、総合的な表現力や鑑賞力を積んだ年度末が望ましいといえるが、必要に応じて適宜、設けるよう工夫する。

ウ 学習指導法の工夫と留意点

(1) 直観的鑑賞の指導

① 「漢字仮名交じり書」作品の直観的鑑賞の指導

対象から受ける第一印象が個々によって微妙に違うのであるから、それぞれの感動を固定した枠内におしこめないようにし、感動をどのように表現したらよいのか、その糸口が発見できるよ配慮することが大切である。

② 当該作品と対象的な特徴をもつ作品とを組み合わせ、両者を対比する中でそれぞれの良さや美しさに気付かせる方法は、感性を育てるのに極めて有効である。次の分析的鑑賞にも進めていきやすくなる。

(2) 分析的鑑賞の指導——書の美を構成する諸要素の把握

① 「漢字仮名交じりの書」分析的鑑賞の指導

a 創作しようとする作品の美の諸要素を分析的に鑑賞する場合、用筆や運筆、点画や字形の構成などに視点を当てて見させるようにする。

b 字形の構成について具体的に鑑賞の視点をあげると、楷書、隸書、篆書では、点画の位置、方向、長短、曲直、均斉、均衡などがある。また、行書、草書、仮名の古典を対象とする場合は、これらのほかに、点画や線の肥瘦、潤濁、運筆の遅速・緩急、抑揚のリズムなどが視点となる。これらの要素は全体構成を直観的、分析的に鑑賞する場合にも重要な視点となる。

c 分析的鑑賞は、体験を通して深まるものであるから、表現と鑑賞の関連がいかに密接なものであるか、その都度、理解を促しながら進めていくようにする。

(3) 創作活動を伴った鑑賞の指導

上記の直観的鑑賞や分析的鑑賞に基づく創作活動を通して、総合的に鑑賞を深めながら、作品に潜む表現技法を習得し創作に生かすようにする。

① 創作活動を伴った鑑賞

生徒各自が創作した作品を、個別にまたはグループで相互に鑑賞させる。

まず、全体から感じられる特徴は何か、その第一印象を発表し合う。

② 書の良さや美しさの鑑賞は、多様な感動の質を尊重し、その感受性を助ける配慮を忘れないようにしたい。

③ 作者自身の表現意図、構想から表現に至る計画とその成果を自己分析させ、他者が受けた印象との異同を吟味させる。そのことを口頭で発表させたり鑑賞カードやノートに記録させたりする。

④ これまでの鑑賞学習を踏まえて、創作の意図や構想を吟味させる。参考作品については、「書道Ⅱ」の目標に照らして取りあげるようにする。

(4) 書の美と時代、風土、筆者の個性などの指導

生徒は、日本の歴史を学習し、また、世界の歴史を学習する中で、中国の歴史や風土についての理解も深めてきている。書は、その日本と中国において、風土性、時代性、民族性、社会性、文化や思想などのかかわりの中で発達をとげてきた。それらについて理解を深めることは、文化と伝統の尊重という視点からも、極めて大切なことである。特徴の顕著な教材を比較対照して扱うことによって、それらへの理解が適切に図られるようにすることが大切である。

(5) 表現形式と表現効果の指導

① 条幅、扁額、色紙などは日常生活の中で、また短冊、懐紙、書画帖、巻物などは、国語や美術の学習などで一度は目に触れてきているであろう。博物館や美術館で鑑賞の指導をしたり、スライドなどを使って、これら表現形式がいかに生活に密着したものであるかの理解を図るようにする。

② 作品は、表現形式に即し、表現効果を工夫して書かれるものである。全体の構成、部分の構成、字形、文字の大小、墨の濃淡や潤濁等々によって、表現効果はさまざまに変わる。鑑賞を通してそれらが、表現形式とどのように関連し合っているかを知ることが、そのまま表現力の伸長につながっていく。

(6) 書の変遷、書の現代的意義の指導

(1) これは、書の美と時代、風土、筆者の個性などと合わせて理解され、知識・理解に比重がかかるものである。

(2) 科学の進歩の中で、ともすれば、文字を手書きすることが安易に考えられがちである。書の変遷について知り、書の独自性について理解を深めることを通して、手書きすることの意義に気付き、伝統文化の継承と発展を図る意識も育てられていく。独自性ゆえにその意義は大きく、世界の文化に貢献すべき課題をもつことについて考えさせるよう配慮することが大切である。

(7) 評価の工夫

(1) 「書道Ⅰ」を基盤に、評価の観点を以下にあげておく。

① 書の性情、調和について直観的に把握できるか。

- ② 漢字と仮名の調和や少字数の書の構成について、均斉や均衡の美を味わうことができるか。
- ③ 線質を支えている用筆・運筆が分析的に把握できるか。
- ④ 自分の作品について、意図や構想に即して、適切に自己評価ができるか。
- ⑤ 表現形式と表現効果の有機的な関連性が理解できているか。
- ⑥ 書の美と時代、風土、筆者の個性との関連について理解しているか。
- ⑦ 書の変遷や書の現代的意義について理解しているか。
- ⑧ 表現の能力、鑑賞の能力が、知識や理解と調和しているか。
- ⑨ 鑑賞力が伸びたか。

「書道Ⅲ」 「漢字仮名交じりの書」

1 「漢字仮名交じりの書」の学習指導の工夫

生徒の特性、地域や学校の実態を考慮して「(1)漢字仮名交じりの書」「(2)漢字の書」「(3)仮名の書」及び「鑑賞」のいずれかを選択して扱ったり、目的に応じて、臨書又は創作のいずれかを重点的に指導することができるようになっている。とあるように、非常に幅の広い選択性を持っている。「書道Ⅲ」を行う生徒はあまり多いとは思われないが、「書道Ⅰ」「書道Ⅱ」を履修した生徒がより一層高い段階へと進むことを目指している。

ア 内容の取扱いとその留意点

- (1) 「書道Ⅲ」では、生徒の特性や学校の実態に応じて「漢字仮名交じりの書」だけを選択して指導することができる。
- (2) 「書道Ⅰ」での学習内容、及び「書道Ⅱ」で「漢字仮名交じりの書」を履修したかどうかによって、「書道Ⅲ」での学習活動の在り方が異なってくる。「書道Ⅱ」までの学習経験を十分に考慮の上、効果的な学習ができるよう配慮する必要がある。
- (3) 適切な課題の設定による主体的な学習活動ができるようにする。
- (4) 「書道Ⅲ」では、単に作品を仕上げるだけでなく、制作意図や構想、表現方法の工夫や吟味など、完成に至るまでの過程の指導に配慮する必要がある。
- (5) 日常生活が「漢字仮名交じり」文で行われていることを再認識させ、生涯学習への繋がりの意識を持たせるようにする。

イ 年間指導計画への位置付け方の工夫及び留意点

- (1) 「書道Ⅱ」で「漢字仮名交じりの書」を学習しなかった生徒にとっては、一年間の空白がある。導入に当たっては、「書道Ⅰ」の学習内容との関連を図る必要がある。
- (2) 3分野すべてを取扱いか、あるいは分野の選択を生徒に任すのか、「漢字仮名交じりの書」のみを取扱うのか、学校の実情に合わせた指導計画の作成が必要になる。
- (3) 地域の実態に応じて、「漢字仮名交じりの書」の碑文についての調査研究などを、課題学習として指導計画の中に位置付けることも可能であろう。
- (4) 生徒の実態によっては、「手紙」「はがき」など日常生活と密着した題材についても取扱うことができよう。

ウ 学習指導の工夫と留意点

- (1) 「書道Ⅰ」「書道Ⅱ」で学習した漢字の書、仮名の書の古典やその他の名筆の鑑賞に基づく、漢字仮名交じりの書の創造的・個性的な表現の追求を図っていくことは、堅実な

在り方の一つであろう。

- (2) 生活の中で果している書の役割を正しく理解させ、積極的に生活の中に書を生かしていくよう指導することも必要である。
- (3) 自己の体験から生れた「言葉」を大切に、感動を書にこめて表現することの喜びを味わわせるようにする。そのためには、日常生活の中での感動的な体験について、それをメモに取らせ、短いことばでまとめさせておくことも必要になる。
- (4) 掲示板・掲示物など、学校生活の中での実用としての漢字仮名交じりの書にも、関心を払うよう指導することが大切である。
- (5) 課題学習についても種々の設定の仕方が考えられる。
 - ① 好きな詩や小説などを読んで、そのイメージを言葉に表し、適切な用具・用材によって表現形式を工夫して一連の作品として表現するとともに研究記録をまとめる。
 - ② 適切な人物をテーマに定めて、その生い立ちや作品などを調べ、心をとらえた作品をその心象に応じて表現するとともに、研究記録をまとめる。
 - ③ 日常生活の中に生かされている漢字仮名交じりの書について調べ、目的や用途に即した表現の在り方を研究しまとめる。
 - ④ 地域の実態に応じて、陶書、ろうけつ染めの書の制作などに取組み、作品と研究記録をとりまとめる。
 - ⑤ 素材を共通にし、様々な形式、用筆・運筆、構成、墨色等による表現による創造的・個性的な作品を制作して、研究記録をまとめる。
 - ⑥ 素材の選択も自由にさせて、上記と同様にする。など

エ 教材の工夫

- (1) 「書道Ⅲ」では、素材に自作の詩文などを積極的に取り入れ、意図や構想に基づく表現を工夫させるようにする。
- (2) 近代以降の文人や現代作家の資料等も、幅広く収集して鑑賞教材として活用するようにし、表現の幅の拡大に配慮する。
- (3) 地域との関わりのある詩人、小説家などの文章を素材として取上げ、生徒の興味や関心を高めることにも配慮する。

オ 評価の工夫

それぞれの個性、能力、適性などにより、かなりの個人差が生じてくるものと思われる、個に応じた適切な評価が進められるようにする。

2 鑑賞の学習指導の工夫

ア 内容の取扱いとその留意点

- (1) 「書道Ⅲ」の表現の指導においては、生徒の特性、地域や学校の実態に応じて、特定の分野について重点的・弾力的な取扱いをすることができるが、鑑賞では、その特定の分野とかがかわらせながら、必要に応じて広く他の分野についても取扱うようにする。
- (2) 一方、目的に応じて、臨書または創作のいずれかを重点的に取扱うこともできるので、それとの関連から鑑賞の深化がはかれることにもなるであろう。
- (3) 書は各時代の環境や思想及び文化、即ち、儒教、老荘思想、仏教、茶道、絵画、建築、工芸、文芸など多くの分野と関連して発展してきたものであるから、書の鑑賞を通して文化と伝統を尊重する態度の育成を図りたい。また、書の多様な美は人間性から発して

いることに気づかせたい。

- (4) 中国や日本の書論を読むことを通して、これまでの書の体験が理論的に裏打ちされることに気づき、書に関する理解がいつそう確かになるとともに、ひいては表現や鑑賞の能力が高まり、深まることを期待したい。しかしながら、書論を取上げる場合は、難解なものは避けるよう、十分に吟味することが大切である。

イ 学習指導法の工夫と留意点

- (1) に重点をおいて指導計画を立案する場合は、次のような点に注意し、創作に先立って直観的鑑賞と分析的鑑賞によって、その書の性情とそれを支える技法や理法を把握してから、表現活動に移るようにする。
- ① 鑑賞の目標が明確に設定できているか。
 - ② 生徒の能力、適性に合った教材の選択ができているか。
 - ③ 数種類の古典を鑑賞する場合、時間配当は適切であるか。
- (2) 創作に重点をおいて指導計画を立案する場合は、次のような点に注意が必要であろう。
- ① 鑑賞によって創作意欲を刺激し、興味・関心を高めるよう作例や資料の用意ができているか。
 - ② 生徒の主体的鑑賞を尊重するようにしているか。
 - ③ 学習の目標が明確で、的確に創作作品を鑑賞できるようにしているか。
- (3) 学習の目標を達成するためには、一斉学習、個別学習、グループ学習など、目的に応じた適切な学習形態を工夫する必要がある。
- (4) 鑑賞を主な内容とした課題を設定して学習する場合については、常に生徒の「主体的な学習態度を育てる」配慮や「書についての総合的な理解や技能を高める」配慮が払われているかどうか注目する必要がある。
- (5) 課題については次のことが考えられる。
- ① ある特定の人物に焦点を当て、その人物の名跡を集中的に鑑賞したり臨書したりするとともに、併せてその名跡の成立した背景やその時代の文化等の研究を進め、他の時代との比較研究などを行って成果をまとめるようにする。
 - ② 生徒の特性、興味や関心に応じて、古典と書論の内容との対照や吟味などを通して鑑賞力を高め深化をはかるようにする。
 - ③ 地域の実態に応じて、生活の中の書と文化との関わり、作品の特徴との書の美の多様性などについて研究しまとめるようにする、など。

ウ 評価の工夫

「書道Ⅰ」「書道Ⅱ」の鑑賞の評価に次の観点を加える。

- ① 書の美の多様性と作品の特徴を、鑑賞を通して理解できているか。
- ② 書と文化とのかかわりが、はっきり具体的につかめているか。
- ③ 書論による書の理解と鑑賞の深化についてどう自覚し、また、どう自己評価できるか。

[注記]

- [注1] 高等学校学習指導要項解説，芸術編，第10節，書道Ⅰ，文部省，1999年，165ページ。

- [注 2] 高等学校学習指導要項解説，芸術編 第1節，改訂の趣旨，改善の基本方針，文部省1999年，7ページ。
- [注 2] 入門毎日書道講座 6，近代詩文書 I，金子鷗亭編，古典を学ぶことによって力を養う，毎日新聞，1975年 39ページ。
- [注 3] [注 4] 入門毎日書道講座 6，近代詩文書 I，金子鷗亭編，漢字とかなの調和，毎日新聞，1975年，44ページ。
- [注 5] 近代詩文書講座，第1巻，基本養成編，古典の応用，古典をどう織り込んでゆくか，日貿出版社，1974年，82ページ。 [注 6]
- [注 6] 高等学校学習指導要項解説，芸術編，第11節，書道 II，文部省，1999年，197ページ。